

3 考察

患者は1955年より眩暈，息切れ，疲労感，頭重感，耳鳴等の貧血症状を訴え，1959年9月結核予防検診で軽症の結核症の診断を受け在宅患者として加療中であつた。

患者は沖縄本島東部の与那城村の離島平安座で生まれ，全島で成人し沖縄本島から本土その他の地域に1歩も出たことがなく，又沖縄近海で捕獲された魚貝類以外は摂食したことがないと云う。広節裂頭条虫の中間宿主の分布してない沖縄で本虫が検出されたと云うことは寄生虫学上興味ある問題を提供したもので，沖縄に於ける本虫の中間宿主の分布については今後の調査に俟ちたい。

4 結語

私達は1960年2月コザ保健所管内の結核在宅患者から広節裂頭条虫の体節の1部と虫卵を検出した。中間宿主の鱒が分布してない沖縄に於いて

本虫が検出されたことは寄生虫学上非常に興味ある1例だと思ひ茲に報告した次第である。

終りに臨み，虫体の同定並びに御指導を賜つた日本大学農獣医学部寄生虫学教室の谷口守男教授並びに本虫の標本供覧に便宜を与えて下さったコザ保健所の砂川勝美医師に深謝の意を表す。

参考文献

- 1 佐々学著(1956)：日本の風土病，法制大学出版社発行
- 2 森下哲夫，加納六郎著(1963)：新寄生虫病，南山堂発行
- 3 砂川勝美(1965)：広節裂頭条虫症の治験例(十二指腸ゾンデ使用によるファイルマロン投与)，沖縄医学会雑誌 Vol. V Ⅱ 1, 42 ~ 44
第2回沖縄公衆衛生学会総会(1971)記録集掲載

沖縄県下における人のフィラリア防圧 の歴史的概説

衛生動物室 国吉真英

沖縄におけるフィラリア症の研究は，古くは1911年峰直次郎，望月代次先生らによって着手され，鱒平名紀勝，鱒平名紀秀，仲地紀晃，比嘉賀善の諸先生，その他県内外の先輩学者によって調査研究された。

特に1937年～1948年に亘って吉野，

大浜，西郷の3博士らによって，沖縄，宮古，八重山の各諸島における本症の疫学調査が広範に行なわれた。然しながら今次沖縄戦により本症の調査研究も一時中断のやむなきに至った。尚沖縄県下における戦前の糸状虫症の調査成績は第1表の通りである。

沖縄県略図

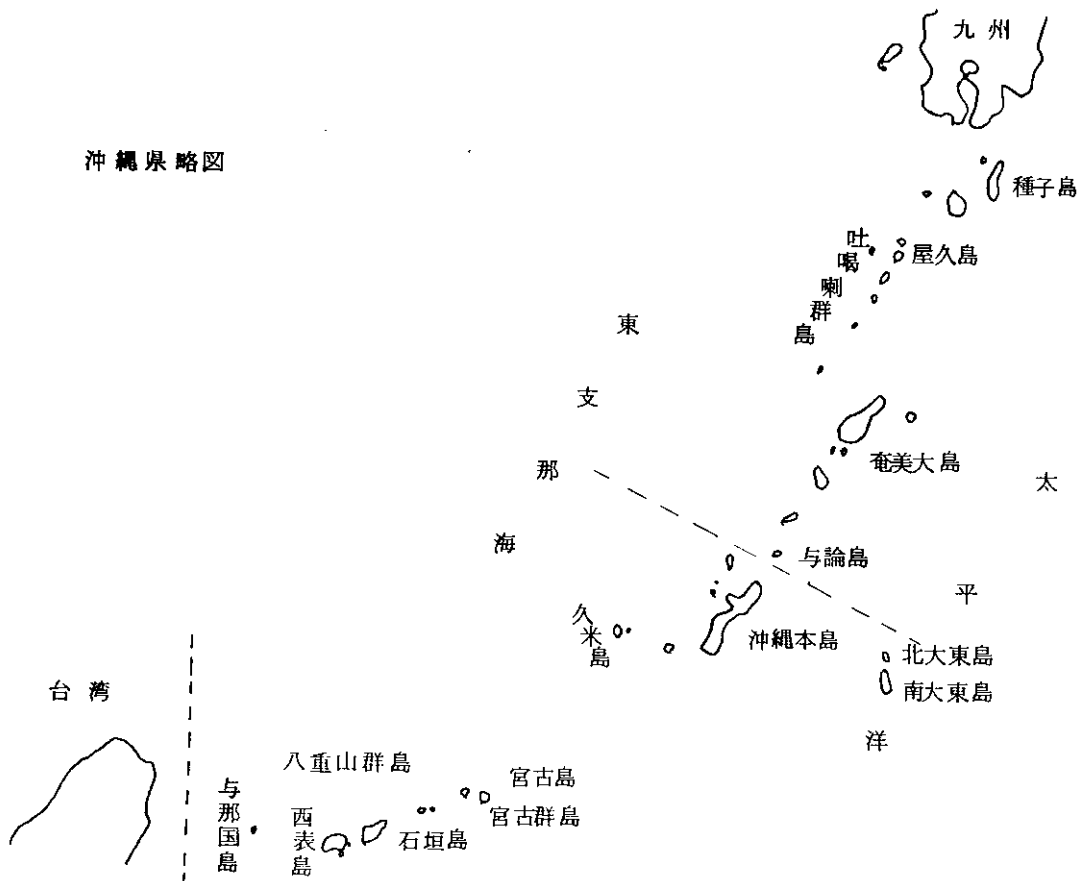


表1 戦前の調査成績

区分 村字別	検査人員	仔虫感染人員	感染率(%)	備考
喜屋武村	1,283	276	21.51	沖縄本島
与那城村字鱒辺	459	15	3.27	"
名護町幸喜	290	44	15.17	"
伊平屋村伊是名	753	109	14.48	"
大宜味村根路銘	540	40	7.41	"
小祿村鏡水	777	97	12.48	"
本部村瀬底	1,260	173	13.73	"
東村平良	422	37	8.77	"
南風原村官城	642	213	33.18	642人に対し3回に亘り検血
大浜村白保	688	44	6.40	八重山島
伊原間	85	5	5.58	"
石垣町川平	492	45	9.15	"
浮海	40	5	12.50	"
大浜村平久保	35	3	8.57	"
計	7,766	1,106	14.24	

注 沖縄県衛生課調査(自昭和8年 至昭和12年)沖縄県衛生課編(昭和13年9月)沖縄県衛生状態概要による。

戦後1949年、国吉らが宜野座村民について本症の調査を実施して以来、琉球衛生研究所、琉球大学ヘルスセンターの吉田朝啓博士、東京大学医学研究所の佐々学教授、長崎大学熱帯医学研究所の片峰大助教授、大森南三郎教授、鹿児島大学医学部の佐藤八郎教授、東京医科歯科大学、宮古平良市福嶺紀仁博士、八重山保健所西表島支所の仲里朝貞医官、九州大学医学部の川島健治郎博士、多田功医学士、琉球政府厚政局管下の各保健所等によって沖縄県下各地に於けるフィラリア症の疫学調査が行なわれ、本症の浸淫状態が漸次明らかにされてきた。

この間に疫学調査と相俟ってヂェルカルバマジン錠(スバトニン錠)による集団駆虫が実施されたが、これはあくまで限定された一部の地域のみ行なわれたに過ぎない。琉球政府厚生局では風土病対策の一環としてフィラリア防圧に就いて、公衆衛生の面から問題点として取り上げるには未だ機が熟せず、衛生研究所、琉球大学ヘルスセンター、本土大学研究所等の調査研究の対象として1961年頃まで実施されていたに過ぎない。戦後の調査成績を参考までに示せば、第2表の通りである。

表2 戦後の調査成績
〔沖縄に於ける過去18カ年の糸状虫症調査成績(1949~1966年)〕

調査地	被検者	仔虫保有者	仔虫保有率(%)	
沖縄本島	北部	8,633	663	7.7 (旧国頭郡)
	中部	8,158	777	9.5 (旧中頭郡)
	南部	19,729	1,366	7.0 { 島尻郡(那覇市を含む) }
	小計	36,520	2,806	7.7
宮古群島	宮古島	128,926	17,613	13.7 (旧宮古郡)
	伊良部島	22,403	3,559	14.9
	多良間島	5,475	862	15.7
	小計	156,804	22,034	14.9
八重山群島	石垣島	11,491	1,156	10.1 (旧八重山郡)
	西表島	3,856	233	6.0
	与那国島	1,306	161	12.3
	その他の離島 (波照間島, 鳩間島)	577	88	14.4
小計	17,230	1,638	9.5	1965年宮古群島のフィラリア防圧が実施され、その成果が上がり現在(1968年10月)その仔虫保有率は1.9%と著しい低率を示している。
沖縄本島周辺離島	11,418	997	8.7	久米島・慶良間列島・伊平屋島・伊江島・古宇利島・伊計島・宮城島・平安座島・津堅島・久高島・南北大東島
総計	221,972	27,470	12.4	

注・琉球衛生研究所国吉真英編、沖縄における糸状虫症の調査成績による。

1961年10月、宮古島における熱帯風土病総合調査が長崎大学によって実施された。

この調査に琉球大学ヘルスセンター吉田朝啓、琉球衛生研究所仲地紀良、国吉真英、新城長重、仲地国夫等が参加、今峰大助、大森南三郎両教授指導の許に宮古島に於けるフィラリア症の調査が実施された。この調査の結果、宮古島のフィラリア浸淫度が25%以上の高率を示していることが判明し、同島に於ける住民のフィラリア症予防計画の早急の樹立が痛感された。

1963年7月、本土政府技術援助による講師招聘により、長崎大学熱帯医学研究所の片峰大助教授が来島、今峰教授指導の許に宮古島平良市大浦、細竹、盛加、七原の4カ所に、フィラリアモデル部落を設定し、衛生研究所、宮古保健所、那覇保健所（平田久夫医官）3者共同で、フィラリアの駆除実験が実施された。

当時の米国民政府公衆衛生福祉局長Dehne大佐は、宮古島のフィラリア症に多大なる関心を寄せ、宮古島に於ける本症の浸淫状態、予防対策等に就いて今峰教授の意見を熱心に聴取し、片峰教授よりフィラリア症に関する予備知識を得るに至った。これが契機となって大規模なフィラリア症防圧対策へと発展した。

1964年、米国民政府は沖縄県下におけるフィラリア防圧の必要性を痛感し、琉球政府厚生局と話し合いの結果、日米両国援助の許に琉球政府が沖縄におけるフィラリア防圧の年次計画を樹立

することになった。

初年度は、宮古群島から着手することとなり、この計画に東京大学医科学研究所の佐々学教授、在日米軍第406科学研究所のKee gan博士が指導に当り、1965年1月から宮古島のフィラリア防圧作業が開始された。

第1回全住民の検血成績は受験率99%、仔虫保有率は19.9%の高率を示した。ジェルカルバマジン錠による集団駆虫後の第2回全住民の検血成績は受験率100%、仔虫保有率は4.9%の低率を示した。宮古島のフィラリア防圧作業は世界に誇るべき成果をあげ、一応1966年12月防圧作業は終了した。

同島のフィラリア防圧に就いて厚生局に於ては其の防圧班の人員を縮小し、引き続き仔虫保有者に対して検血、駆虫を行ない、2カ年後に再び全住民の検血を実施し、同島におけるフィラリアの徹底的駆除を計画し実施中である。今回の宮古島のフィラリア防圧成績は学問的にも貴重な資料を提供したものと高く評価されている。

第二次フィラリア防圧作業は1967年3月八重山群島の石垣島から開始され、多大な成果をあげ、1968年12月防圧作業は一応終了したが、防圧班の人員を縮小し引き続き仔虫保有者に対して検血、駆虫を実施中である。宮古、八重山両群島のフィラリア防圧成績は第3表のとおりである。

表3 宮古，八重山両群島フィラリア防圧実施成績
A 宮古群島フィラリア検血成績(宮古フィラリア防圧本部資料による。)

市町村	第1回 1965・1・11～93			陽性者 1965・9・20～66・1・15			第2回 1966・4・4～11・22			第3回 1967・1・17～68・10・28		
	対象人口	実施人口	陽性者率	対象人口	実施人口	陽性者率	対象人口	実施人口	陽性者率	対象人口	実施人口	陽性者率
平良市	30,138	29,810	98.8	4,072	3,940	97.8	714	2,514	29,154	27,373	77.3	352
城辺町	14,390	14,234	98.9	2,770	2,731	98.6	428	13,318	12,929	12,924	100.0	284
下地町	5,124	5,074	99.0	917	895	97.6	141	4,834	4,834	4,520	100.0	88
上野村	4,588	4,551	99.2	999	970	97.1	205	4,257	4,257	4,005	100.0	86
伊良部村	10,201	10,104	99.0	2,076	2,061	99.3	410	9,143	9,143	8,929	100.0	246
多良間村	2,579	2,560	99.3	545	544	99.8	106	2,371	2,371	2,313	100.0	103
計	67,020	66,333	99.0	11,334	11,141	98.3	2,004	68,077	68,077	60,069	100.0	1,159

備考 第1回全住民検血 仔虫陽性者の投薬後の成績 第2回全住民検血 第3回全住民検血

B 八重山群島フィラリア検血成績(八重山フィラリア防圧本部資料による。)

市町村	第1回 1967・3・14～8・10			陽性者			第2回 1968・2・12～11・24		
	対象人口	実施人口	陽性者率	対象人口	実施人口	陽性者率	対象人口	実施人口	陽性者率
石垣市	40,064	38,289	95.6	2,756	7.2	41,665	38,399	80.2	907
竹富町	6,069	5,917	97.5	484	7.8	5,290	5,094	96.3	160
与那国町	3,299	3,299	100.0	200	6.1	3,184	3,110	99.2	49
計	49,432	47,505	96.1	3,400	9.9	50,047	41,603	83.1	1,116

備考 第1回全住民検血 仔虫陽性者の投薬後の検血は実施せず 第2回全住民検血

注 1) 宮古，八重山両群島のフィラリア防圧作業は夫々、1965年2月，1967年3月から実施され現在まで防圧作業が続けられている。
2) 検血はいつでも午後9時～12時の間に行ない，耳朶より30C^{mm}の定量採血を行ない，高層標本を作成し，落血後ギムザ染色を施し鏡検した成績である。

第三次フィラリア防圧作業は1969年10月
 沖縄本島北部地区を対象に開始され、目下防圧実
 施中である。尙各地で実施されているフィラリア
 防圧作業は当該保健所が実施に当たっている。

以上が沖縄県下に於けるフィラリア防圧の歴史

的概説であるが、沖縄の風土病として重要な位置
 を占めているフィラリア症も、政府当局の集団駆
 虫実施と相まって、環境の整備と住民の生活の向
 上とにより、表4に示すが如く衰退の一路を辿り
 つつある現況である。

表4. 最近の糸状虫調査成績
 (1967年～1969年) 沖縄公害衛生研究所資料

調査年	被検者 ¹	仔虫保有者	仔虫保有率(%)	備 考
1967	5,644	277	4.9	沖縄本島, 伊是名島
1968	7,954	192	2.4	沖縄本島, 屋我地島, 宮古島
1969	11,179	161	1.4	沖縄本島, 慶良間列島, 伊計島
計	24,777	630	2.5	

注 検血は午後9時～12時の間に行ない、耳朶より30C_{mm}定量検血を行ない、高層標
 本を作成し、溶血後ギムザ染色を施し鏡検した成績である。

参 考 文 献

- 1) 沖縄県衛生課編(昭和13年9月): 沖縄県
 衛生状態概要(フィラリア予防に関する状況)
- 2) 国吉真英(1953): 宜野座村民のフィラリ
 ア仔虫検査成績, 獣医畜産新報, 112, 52
 4～525
- 3) 片峰大助, 吉村税, 吉田朝啓, 国吉真英, 仲
 地紀良(1962): 宮古島に於ける腸内寄生虫
 及び糸状虫感染状況, 長崎大学風土病紀要第4
 巻第3号, 166～175
- 4) 国吉真英(1961): 沖縄に於ける過去11
 年のフィラリア調査成績, 琉球衛生研究所報第
 2号, 43～53
- 5) 平田久夫, 国吉真英, 城間盛吉, 平謙善保,
 片峰大助, 吉村税(1965): 沖縄宮古島にお
 けるフィラリア集団治療の経過, 寄生虫学雑誌,

第34回日本寄生虫学会記事特集14(4):

337～338

- 6) 片峰大助, 平田久夫(1967): 宮古島モデ
 ル部落に於けるフィラリア集団治療2カ年の経
 過, 寄生虫学雑誌, 第36回日本寄生虫学会記
 事特集, 16(4): 40～41
- 7) 国吉真英編(1970): 沖縄における糸状虫
 症の調査成績(1949年～1969年), 財団
 法人沖縄寄生虫予防協会発行
- 8) 宮古保健所フィラリア防圧本部資料, 宮古群
 島フィラリア検血成績
- 9) 八重山保健所フィラリア防圧本部資料, 八重
 山群島フィラリア検血成績

{ 獣医畜産新報, 昭和46年11月1日号(1971)
 №554: 1140～1142, 掲載 }